

水土里レポート 投稿様式

投稿月日	平成29年7月12日
タイトル	今年もみんなで給食米を植えたよ！
水土里レポーター名	水土里ネット福山 佐々田 愛

平成29年6月2日（金）福山市立東村小学校全児童44名と福山市立東村保育所児童16名が、学校給食食材納入グループ「若草会」の学校農園約20aのほ場で、給食で食べるお米の田植えをしました。

晴天のなか、保育所と小学校から歩いてほ場まで子ども達がやってきました。



はじめに学校給食食材納入グループ「若草会」より挨拶があり「今年で6年目となり、子ども達も田植えのプロのようになりました。今年も頑張って田植えをしましょう。」とお話されました。

子どもを代表して「みんなで楽しみにしていた田植えの日がやってきました。去年、田んぼへ入ったらヌルヌルした土の感触が気持ち良かったです。」と挨拶しました。

いよいよ田植えです。子ども達全員が横一列に並び、田んぼへ入ります。高学年の子ども達は慣れたもので、黙々と一番奥まで歩いていきます。低学年の子ども達は、「気持ち悪い！」と言いながら顔は笑顔で、歓声をあげながら土の感触を楽しんでいるようでした。



取材のテレビカメラの前でも自然な身のこなし！



地域の方が立てた鯉のぼりが見守ります！

地域の方が「苗を3本ずつ持って植えるんよ。植え方はもう言いません。」と言われ、高学年の子ども達は真剣な表情で植えていました。手さばきも足さばきも慣れていて、自分の足あとをさりげなく足でなおしている姿は大人顔負けです。

低学年や保育所の子ども達は、最初は戸惑っていましたが若草会の方に教えてもらうとすぐに上手に植えられるようになりました。小さな手で苗をピンと立てて植えると誇らしげな表情で、次々に植えていました。

田んぼの中には、オタマジャクシやタニシがいて、子ども達は稲を植えていても気になってしょうがないようですが、我慢して田植えに専念していました。

あつと言う間に植えていき畦から離れて苗がなくなると、子ども達が先生や地域の方に「苗をお願いしまーす。」と声をかけ、苗の束を豪快に投げ入れられ、子ども達が次々にキャッチして歓声があがっていました。



子ども達が田んぼの4分の1を手で植えると学校給食食材納入グループ「若草会」の^{かいの}廻野さんが田植え機で颯爽と田植えをして見せてくださいました。子どもも試乗させてもらい、田植え機の上からみんなに手を振りました。

最後に、校長先生より「今日は無事田植えが終わりましたが、明日から若草会の皆さんは大変です。何が大変だと思いますか。」と聞かれました。子ども達からは「水の管理」「害虫」「台風」と次々に声があがりました。専門的な言葉を知っている事にびっくり、特に「水の管理」という言葉が出てきたのは、毎年農業用水路の防災について話をして啓発していることが浸透しているのかなと嬉しくなりました。

校長先生は、「これから4か月間、毎日稲の成育を見守ることが一番大変なことです。みんなと一緒に稲の成育を見守りましょう。」と話され、若草会の皆さんに「ごはんはもとより、多くの野菜を納入していただき、子ども達の好き嫌いがなくなり野菜が大好きになりました。若草会や地域に皆様方に感謝し、毎日給食をいただいております。」と話され、最後は子ども達全員でとても大きな声を「ありがとうございました」と挨拶をして田植え体験は終了しました。

若草会の皆さんが用意してくださったおむすびが振舞われ、おむすびには子ども達からメッセージが添えてありました。

「私達は、学校農園でとれた広島県で一番おいしいお米を毎日給食でいただいているおかげで、みんな元気に成長しています。運動会ではみんな全力を出し切り大成功させました。みなさま、今日はありがとうございました。」

など心温まるメッセージが添えてありました。メッセージを読みながら頬張るおむすびはとてもおいしかったです。



ここ東村町は、水土里ネット福山が平成3年から平成5年にかけてほ場整備事業を施行した地域で、地元農家を中心とした若草会と小学校・保育所が連携した給食米の取り組みは、地産地消の実践例として市内の基盤整備実施地区のモデルケースとなっています。

水土里ネット福山は、東村町の取り組みに協力し一年を通じて農業体験を取材し全国へ情報発信します。

